月読神　－ツクヨミノカミ－

４－ＢＵ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月読神　ーツクヨミノカミー

【Ｎコード】
Ｎ３０２１Ｐ

【作者名】
４ーＢＵ

【あらすじ】
極々平凡な生活を送ってきた主人公、彼は大学へと向かう途中ある少女と出会う、彼女は独り言のように「人の死期」をつぶやいている、偶然それを聞いてしまった主人公は平凡だった日常が一変、はたして彼女の正体は？そして主人公との関係は？

壱の語り部　ー　プロローグ　ー

あ～ぁ・・・暇だな・・・
とりあえず大学にでも行くか・・・

俺の名前は『田中(たなか)浩二(こうじ)』

「うわ！単純な名前！」って思ったあんた！正しい感性をしてるから安心していいと思うぞ。
このどこにでも居そうな平凡な名前の俺は、極平凡な大学に一年前から通い始めた、極々平凡な大学生だ。

どれくらい平凡かと言うと、俺一人のデータさえ採れば、わざわざ日本人全員のデータを採って平均値を出さなくても済むって自信があるくらい平凡なんだな
学力も「頭が悪い」って馬鹿にされた事も無い代わりに「頭がいい」って褒められた経験も無い。
他人から羨ましがられる様な特別な能力や特技がある訳でもなければ、人に自慢出来る出来事を経験した訳でもない・・・
って改めて考えたら余りにも平凡過ぎる人生で気持ちが落ち込みそうになるけど、物は考えようだ！
不幸な事も経験してないんだから、俺って実は世界一幸せ者なんじゃないか？！そうだ、そうに違いない！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
虚しいからこれ以上考えるのは止めよう・・・

大学に合格してからは一人暮らしをする為に東京にアパートを借りたんだが、どうして東京と言う所はこんなにも物価が高いんだろうな！
親の仕送りだけを当てにする訳にもいかないから一応近所の居酒屋でアルバイトをしているが、その給料の大半は家賃の振込みやら光熱費の引き落としで『現金』としてこの目で見る事なく通帳から消えてしまう、残ったお金では質素な生活で遣り繰りして行くしかないし・・・
はぁ、考えれば考えるほど虚しい・・・

大学はアパートの最寄り駅から電車で二つ目の所にあって、駅からは歩いて七～八分くらいで結構近い。
最初は流されるように歩いていただけだが、慣れてくると周囲の人間の様子も目に入ってくる。
いわゆる『人間ウォッチング』と言うやつだが、これが中々楽しかったりするんだな。
服装も学部によって結構違いが出るんだが、観察し過ぎて今では「服装を見ただけでこいつは〇〇部だ」って当てられるスキルまで身につけてしまった
まぁ平凡な服装の俺は何学部なのか誰にも分からんと思うが・・・

赤信号で止まった俺の前に身長が１５０ｃｍくらいの女の子が立っている、中学生・・・なのかな？
いや、この先には中学校も高校も無い筈だから当然大学生と言うことになるが、今まで一度も見た事が無いから新入生なのかも知れないな
先に言っておくが俺はいつも女の子の事をジロジロと見ている訳で

はないぞ、たま～にチラリと見るくらいだ。
じゃあどうして大勢歩いている人混みの中で、この子にだけ目が行ったのか言い訳させてもらうと、さっきのスキルが全然通用しないからだ、どこの学部なのか想像もつかない。
って言うか大学生の団体の中だと一人だけ浮いてかなり目立ってる。

まず服装だが全身黒の着物に黒い帯、足元は白い足袋に黒い草履・・・
ってよく見たら、それ喪服じゃないのか？いくら服装は個人の自由だとは言え喪服で授業を受けるのは駄目だろ？教室中ドン引きになるぞ！
髪は真っ黒なストレートで腰の帯が隠れるくらい長く、顔は色白なのに唇の赤さだけが妙に目に付く
結構可愛いとは思うけど、冷たく無表情な目のせいか人形のように見えてしまう。

しかし俺がこれだけ気になってるのに周りの奴等の関心の無さと言ったら恐れ入るな、こんな場違いな子が居ても誰一人として目線を動かす事さえしない、
自分以外の事には全く興味がないって事なのか？関心の無い事は視界にも入らないんだ・・・例えば俺がここで一日中倒れてても多分誰も見向きもしないんだろうな
はぁ、恐るべし東京・・・だな。

その時だ、不意に俺の耳に彼女の声が入ってきたのは

『この人・・・明日１４時４６分・・・転落死・・・自殺するのね』

・・・こわっ！
何を言い出すんだこの子は！しかも無表情のまま！
確かに俺も時々電車の中で優先座席に平然と座ってるような奴を見たらムカついて
（こいつ、座席が後ろに倒れて電車の外に飛び出したらいいのに！）
とか心の中で考えたりするけど、今この子は明らかに声に出して言ったぞ！

『あの人・・・９時２３分・・・車に轢かれて死亡・・・』

また言った！
今度もハッキリと声に出して言った！
ってか『あの人』って事は交差点の向こうの人に対して言ったのか？
しかも９時２３分ってあと１０秒も無いじゃ・・・
俺が腕時計を見た途端周りが一気にざわめき、悲鳴と怒鳴り声が響いた。

「きゃぁあぁあぁあ！」
「誰か！急いで救急車を！」
「早くしろ！！」

お、おい・・・どう言う事なんだよ！
今信号は赤から青になる所だった・・・

交差点の向こうに居た男性がフライング気味に飛び出すのまでは見た・・・

でもそこに車が突っ込んで来るなんて、どうしてこの子は知ってたんだ？
どうして正確な時間まで分かってたんだよ？！

周囲の空気が固まり時間が止まったかのように誰も動けない中、彼女だけが倒れている男性の方へ向かって歩いて行った。

え？何してるんだよ！あの人どう見たって即死状態じゃないか・・・
まさか死体を見にいったのか！
やばいやばい！絶対にあの子やばいって！

彼女は倒れている男性の傍に立つと両手の平を自分の胸に当て静かに息を吸い込んだ。
いや、正確には『息を一口だけ飲み込んだ』が正しいような、そんな不思議な動作だった。
なんて悲しい表情をしてるんだよ、知り合いか誰かだったのか？
でもそれだと死の予告の意味が分かんないし・・・謎だ。

その時彼女の体が一瞬だけ青白い靄に包まれたような、そして倒れてる男性から黒い影が消えたような、そんな気がしたんだが、目を擦って見直すとそこには彼女の姿はもうなかった。

しかし朝から凄い出来事に遭遇してしまったな。

今まで平凡に過ごしてきた俺には到底考えられない事だ、どうせ意表を突いた出来事にあうなら『幸せな方』でお願いしたいものだ。

授業とバイトを終えアパートへ帰る俺、時間は午前０時

「ただいま～、あぁ疲れた・・・」

当然誰かが待ってる訳ではないが黙って真っ暗な部屋に入ると気が滅入るので一応言ってみただけだ。
都会は物価は高くて金銭的には辛いが、男が一人暮らしするには便利でいい。
帰り道にはコンビニも弁当屋もあるし、包丁なんて握った事のない俺でも十分栄養を摂取する事ができる。

質よりも量を選んだ俺は『のり弁当』二つを平らげ布団の上にゴロリと横になった。

ん～・・・疲れているのに中々寝付けないな・・・
やっぱり落ち着いたつもりでも今朝の出来事が尾を引いてるんだと思う、なにせ人が死ぬ所なんて初めて見たからな、それも至近距離で・・・思い出すと益々眠気が飛んでいく

それにしても事故以上に気になるのがあの『女の子』の事だ。
どうして彼女は事故が起こるのを分単位で予測できたのか、どう考えても答えが出てこない。
轢かれた当人は勿論の事、周りの誰一人として近付いてくる車の存

在に気が付いていなかったんだからな

事故の後の彼女の行動も気になる
動かなくなった男性の傍らにたたずむ姿、息を飲む不思議な行動、
そしてその後に見せた悲しげな表情
それらの全てが脳裏に焼きついて離れない。

あ～！一人でアレコレ考えてても何一つ進展しないんだから直接聞いてハッキリさせよう！
大学の生徒だとしたら明日も正門の前で待っていれば会えるはずだし、うん、それがいい！

でも、よく考えたら俺って今まで一度も女の子に声掛けた事なんてないや・・・
どうしよう・・・

弐の語り部　　ー　ネノクニ　ー

夜中に考え事なんてするもんじゃないな、いつの間にか外が明るくなってきてるし
完全に起きてた訳じゃないけど寝た気全然がしない、今から寝直したとしても逆に疲れるし
仕方ない少し早いけど大学に行ってあの子が来るのを待つとするか。
待ってる間にどうやって声を掛ければいいのか考えたらいいしな

昨日の帰りに買ったアンパンと牛乳で朝食を取り、大学へと向かった。
やっぱりまだ早かったのか人の姿は疎らであった

この時間だったら彼女もまだ来てないだろ
俺は正門の前に陣取って通学してくる学生を見渡しながら頭の中でシュミレーションを繰り返していた。

（ねぇ彼女！昨日は何してたの？死体を見てたの？）

いや、駄目だろ！初対面の人間にいきなりそんな事言ったら怒って叩かれてもおかしくないし。
逆にニッコリ笑って「えぇ、そうなの」なんて言われたら俺の方が対応に困るしな

（一目見て気になってたんです、お話でもしませんか）

いやいやいや、これも駄目だろ！人が事故にあって亡くなってる時に女の子を見てたなんて軽蔑されるに決まってるしな

（キミどうして喪服なんか着てるの？）

突っ込む所はそこじゃないだろ！
あぁもう！どうして俺は気の利いた言葉一つ思い浮かばないんだよ、全く脳ミソまで平凡で嫌になる！

それにしてもそろそろ来てもおかしくないと思うんだが、まさか今日は来ないとか言う事はないよな
って彼女が大学生だって事を前提で考えてるけどもし違ってたら、ここで待ってるのは意味無いって事じゃ・・・

あ～！時間を無駄にした！だいたい一回だけ見た女の子を捜すために早く大学まで来るって俺はどんだけ暇なんだよ！
ドッと疲れが出てきたな、午前中はサボって午後の講義でも受けるとするか。

駅前の漫画喫茶で時間を潰した後、そこで昼食も済ませ教室へと向かった

教室に入るといつもの席に座った、１番後ろの窓際の席、ここが俺

の指定席だ
別に決まってる訳じゃないけど不思議と誰も座らないので毎回ここに座わる事にしてる
日差しが気持ちいいし、窓の外を行き交う学生を見るのも楽しいしな、ここでも恒例の『人間ウォッチング』は欠かさない。

ん？そう言えば何か忘れてるような気が・・・

窓の外を見ると何かがおかしい、みんながこっちを見てる・・・いや違うな、校舎の上を見てるんだ
どんどん人が集まって来たぞ、上を指差してるけど一体何があるって言うんだよ

不意に目の前を黒い影が上から下へと凄い速度で通り過ぎた、今のは一体何だったんだ？
何が起こったのか理解できない俺の頭の中に昨日の彼女の言葉が甦った

『この人・・・明日１４時４６分・・・転落死・・・自殺するのね』

俺は慌てて腕時計を見た・・・１４時４６分・・・嘘だろ！
窓の外を見るとパニックを起こしてる学生の中をまっすぐ校舎に向かって来る人影があった
彼女だ！
急いで教室を飛び出し校舎の外に出るとそこは凄い光景になっていた
大声をあげている学生、パニックで泣き叫ぶ女生徒、携帯電話で救急車を呼ぼうとしてるが焦って上手く話せないでいる教師

色々な雑音が交錯している中で彼女の周りだけ静寂な空間が広がっているように思えた

校舎の近くに視線を移すとそこには、今飛び降りたであろう血まみれの女性とその傍で静かに立っている彼女の姿があった。

そこでも彼女は昨日と同じ様に自分の胸に手を当て、息を一口だけ静かに飲み込んだ

やっぱり昨日見たのは気のせいじゃなかった、今彼女の体は一瞬だけだが青白い靄に包まれた

「ねぇ・・・キミ・・・」

あれこれと考える前に俺は声を出していた

不意に声を掛けられた彼女は一瞬驚いた表情を見せたがすぐに物悲しい顔になった

なんて表情で見るんだよ、それって俺に対してどんな感情の表れなんだよ・・・

「えっと・・・キミはここの生徒なのか？」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

我ながら間抜けな質問してるよな、そりゃ見ず知らずの男からいきなり質問されたら普通は警戒するだろ！

怖がらせないように優しく質問しなきゃ・・・

「どうしてキミはこの人が飛び降りるのを知ってたの？」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

「もしかして飛び降りた女性の知り合いで何か相談うけてたとか？」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

何を聞いても一言も話さないが、俺を見るその眼差しは相変わらず物悲しいままだ

「どうしてそんなに悲しそうな表情をしてるの？」

『命ある者が天命を全う出来ずにその命を失う、それは悲しい事ではないの？』

うぉ！初めて答えが返ってきた！すっげぇ理に適ってる上に静かに淡々と話すから説得力倍増だし！
これじゃ間抜けな質問をすればするほど俺の馬鹿さ加減が露呈してしまう・・・

「あ！あのさ、昨日もさっきも息を一口だけ飲み込んだように見えたんだけど、あれっておまじないか何かなの？」

『息を引き取っていたの』

ん？何か違和感のある言葉だな？
そっか！「息を引き取る」ってのは「死ぬ」って意味だから、普通は死んでいる相手に対して使う言葉なのに、この子は今「自分が」って一人称で使ったから違和感があるんだ

「キミが息を引き取ってたの？それって少し言葉の使い方おかしくない？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

やば！せっかく話をしてくれてたのにいきなり揚げ足を取って怒らせちゃったか

『昔の人は生きている事とは息をしている事だと考えていたんです、だから逆に死ぬ事とは息をしなくなる事・・・そんな考えを持っていたの』

なんか難しい事言い出したぞ・・・

『人は天命を全うする時には必ず最後に息を吸って、旅発ちの準備をしてから「ヨモツヒラサカ」へと向かいます、でも途中でその命

を絶たれた者は最後の息を吸う事が出来ず「ネノクニ」へと迷い込んでしまう・・・』

えっと・・・今この子が話してるのは日本語か？日本語じゃないんだったら誰か訳してくれ！

『だから私はその者が吸えなかった最後の息を引き取り、代わりにこの身に息を取り込む事でその者が「ネノクニ」に迷い込まないようにしてあげてるの』

「それは、その・・・簡単に言うとお葬式で十字を切ったり、ナムナム～ってするのと同じって事でいいのかな？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

やばっ！違ったか！
今彼女の口元が少しだけ緩んだような気もするが、目元は相変わらず悲しげだった。
わかった、この表情は哀れみだ！
頭の悪い弟が「兄ちゃん！追試受かったぜ！」って５０点の答案用紙を自慢げに見せた時に「あぁ、頑張ったな凄いじゃないか」って褒めた時の俺と同じ表情だ！
あぁ～！絶対「こいつ言葉も理解できないバカじゃないの？」って思われたに違いない！

『あなたは・・・・ううん・・・・なんでもありません』

今何を言おうとした？すっごい気になるんだけど！言い澱んだのは絶対にバカにする言葉だよな？
恥ずかしさと後悔の念で頭を掻き毟ってる間に彼女は立ち去っていた。

その日の午後は警察やら何やらが来て大学は休校になった訳だが。
バイトまで時間の空いた俺は彼女の言った言葉の意味を調べに図書館へと行く事にした。

えっと「ネノクニ」「ヨモツヒラサカ」
「根の国」「黄泉平坂」・・・なんだどっちも日本書紀の言葉なのか。

えっと黄泉平坂は現世と黄泉の国、現世と根の国を繋ぐ道で・・・
さっぱりわからん！

今日一日で彼女について分かった事と言えば、日本書紀オタクで神様か何かの宗教にハマってるって事くらいだな
他はまだ謎のまま

って言うか「謎はまだ何一つ解けてない」が正しい表現だな・・・

参の語り部　　ー　哭スル　ー

あれから数日の間は大学でも街中でも彼女の姿を見かける事はなかったが、会えないとなると余計に気になるもので俺は暇がある毎に図書館へ出かけては彼女の言った言葉を調べるようになっていた。

最初はチンプンカンプンだったがやっと理解し始めたぞ！

つまり・・・あれだ・・・

昔、それも仏教なんかが伝わってくるずっと昔の日本人は「生きている＝息をしている」「死ぬ＝息をしない」って考えてた訳だな、まぁ医学も解剖学も発展してない時代に目で見てわかる生と死の違いなんてそれくらいだったと思うしな。

で、老衰や病気で寿命を終える人間は最後に必ず息を吸ってから死ぬ・・・って確認した訳じゃないから本当かどうかは分からんがどうやらそうらしい。

だから当時の人達は死ぬ前に息を吸う事は天国・・・って、その時代は黄泉の国か

そこに行く為には「最後に息を吸う行為」が必須条件だと思った訳だ・・・うんうん、ここまでは理解できる。

そうすると事故やなんかで突発的に死んだ人は最後に息を吸う暇もなく死ぬ訳だから黄泉の国への入場券が無いって事になるわな

だから死者が・・・え～っと、あれだ・・・「ヨモツヒラサカ」とか言うややこしい名前の道で迷子になって「ネノクニ」とか言う場所に行かないように生きている人が代わりに最後の息を吸ってあげる・・・それが「息を引き取る」って行為な訳だ！・・・うん！

死後の世界については色んな宗教や考え方があるのは分かってたが、こんな考え方もあったんだな
我ながら平凡な脳ミソでよくここまで理解したもんだ！
それにしてもここまで勉強したのって何年ぶりだろうな自分で自分を褒めてあげたいくらいだね

まぁこれで彼女の思想や考え方は分かったけど、どうして死の時間や状況が事前に分かっていたのかって、そう言う根本的な疑問は何一つ解決してないし
その辺りも含めてもう一度彼女と話が出来たらいいんだけどな・・・
そうだ！大学の事務所で調べてもらったら名前くらいは分かるんじゃないか！よし、膳は急げだ！

「そんな生徒は在籍してませんね」

くっ！・・・冷たい返事だな、もう少し優しく対応できないのか？
（ん～、一通り名簿を調べてみたんですけど、そんな特徴の女生徒さんは見当たりませんねぇ，ごめんなさい、また何か情報があるようだったらお知らせしますからね）
とか嘘でもいいから言えよな？！、

ブツブツと文句を言いながら帰ろうとした俺の前を喪服の女性が・・・彼女だ！
何たる偶然！いや神様の悪戯か！
思わず俺は駆け寄って声を掛けた

「ねぇキミ、俺の事覚えてない？」

『・・・覚えています、私に話しかけて来る人は居ませんから』

ふ～ん、意外だな、結構可愛いからナンパとかされてそうな感じなんだけど、やっぱりこれか？喪服のせいか？
って言うかいつも喪服着てるんだな・・・

「時間とか空いてない？もしよかったら話でもどう？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

「この前の「ヨモツヒラサカ」とかについて少し聞きたい事があってさ」

我ながら下手くそな誘い方だな、もし俺が女だったら絶対逃げるぞ・・・

『・・・べつにいいですよ』

ん？「べつにいいです？」・・・
そうか！これは「結構です！」とか「いりません」って言う否定の意味の・・・

『どこでお話をします？』

え～！ＯＫって意味だったのか！女の子ってこんな簡単に誘えるものなのか？

「じゃ・・じゃあそこの喫茶店でもいい？」

小さく頷く彼女と駅前の小さな喫茶店に入ると中は意外と空いていた
駅前だと言うのにお客が全然居ないなんてな、まぁこの方が落ち着いて話ができるしいいか

「お一人様ですね？お好きな席にどうぞ」

はぁ？一人？
あ～・・彼女が小さくて黒い着物を着てるから気がつかなかったんだな
俺はウェイトレスに指を二本立てて見せ、一番奥の席に座った

「何か飲むでしょ？おごるから何でも頼んでいいよ」

『私には飲むと言う行為が必要がないので気にしないでください』

変な断り方だな・・・声を掛けられる事が無いって言ってたし緊張してるのかな？
まぁ徐々に慣れてくるだろ、とりあえず俺はアイスコーヒーを二つ

注文した。

「キミってあんまり話さないね」

『人に話しかけられるのに慣れていないだけ・・・』

「もう少し笑顔になれば可愛いのに、もったいない」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

やばい、緊張してる女の子に対して馴れ馴れし過ぎたか、とは言え俺だって喫茶店で女の子と二人きりで話すなんて始めててもう何を話していいのやら・・・

『人が目の前で死んでいくのに、どうして笑う事ができるんです？』

「うん・・・それは・・・そうだね」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

「そうだ！ごめん自己紹介がまだだったよね、俺は『田中浩二』！単純な名前で覚えやすいだろ！キミ名前は何？よかったら教えてくれない？」

『・・・つきよみみこと』

「つきよみみことさん？」

『そう、月読ミコト、それが私の名前』

「へぇ～ミコトさんか、可愛い名前だね」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

「ねぇミコトさん、こんな事聞いていいのかわかんないんけどさ、この前の飛び降り事件、どうして時間まで正確に分かってたの？答えられない様な事だったら別に答えなくてもいいけど」

『・・・見えるの』

「見えるって？」

『私には顔を見るだけで、その人がいつ、どんな理由で死を迎えるのかが見えるの』

怖い事言い出したな・・・顔を見ただけでその人の死期と理由が分かるなんて

「へぇ～・・凄いね」

『凄い？・・・・』

いきなりこんな不可思議な話を信じろって言う方が無理だよな？だから俺は当たり障りの無い対応で話を濁そうとしたんだが

『人の死ぬ時間が分かるのが凄いと言うんですか？』

「え？だって普通は分かんないんだから凄い能力でしょ？」

『何も・・・知らないくせに・・・』

「え？何？」

『何年もの間多くの人の死を、私がどんな気持ちで見つめてきたか知っているんですか』

やばっ・・・何か気に触る事言ったみたいだな
大声を出す訳でもなく、静かに淡々と話してはいるけど凄く怒ってるのが伝わってくる

『その人がいつ、どんな死に方をするのか分かってるのに私には何も出来ない・・・ただ見ているだけ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『息を引き取ると言う事は、その人の断ち切られた意思や思い出の全てを引き継ぎ、死への準備の代わりを務めると言う事』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『突然死を迎えた者が安らかな気持ちで居るとでも思っているんで

すか?皆「生きていたかった」と泣いているんです』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『そんな意思が全部私に流れ込んでくる・・・悲しい心には触れたくなんかない、だけどそのままにしておけばその人は永遠に迷い続け黄泉の国にはたどり着く事が出来ない・・・だから』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『だから私は息を引き取っているのに、それが凄い事だなんて』

「わ・・・悪かった謝るから!ごめん!」

『私だって好きで死者を送っている訳じゃない、それが私の使命だから・・・』

「だから悪かったって」

『何も見えない方がどれだけいいか・・・そう思った・・・でも見えてしまうんだから放っておける訳ないじゃないですか』

泣かせてしまった・・・彼女の泣き顔を見ると凄く胸が痛い
こんなに取り乱してしまうと言う事は信仰とか思想なんて単純な事ではなくて、彼女には本当に人の死期が見えているんだと思う・・・

それって確かに辛いだろうな・・・友人や親戚、仲のいい人がいつどんな形で死を迎えるのか、そんなのが分かったとしたら俺には耐えられるだろうか・・・多分無理だと思う

その人の顔を見るだけで辛くなってまともに見る事すら出来なくなるだろうな
それに、もし誰かを好きになって、その人の死期が見えたら、想像しただけで辛すぎる！
そんな事ばかり繰り返してたら、友人や恋人なんて作りたくなくなると思う、誰とも係わり合いを持ちたくなくなると思う・・・

そう考えると彼女が笑わないでいつも悲しい顔をしているのも当たり前だな・・・
俺はただ興味本位で・・・知りたいって事だけで触れてはいけない事に触れてしまったようだ

俺は・・・大馬鹿野郎だ！

肆の語り部　　一　命ニ従ガウ　一

長い沈黙の時間が続いた

何分経ったのか、もうすでに時間の感覚は無くなっていたが掛けるべき言葉が思いつかない

今は何を言っても偽善者の軽い言葉になってしまいそうで話せない

しかし今、俺のせいで傷つき、悲しみのどん底へと落ちている彼女を見るのは耐えられない

格好をつけようとするから言葉が軽くなるんだ・・・自分を正当化しようと誤魔化すから言葉が偽善的になるんだ・・・嫌われるのを恐れるから・・・言葉が嘘になるんだよ・・・

だったら俺は今の気持ちを正直に話して謝ればいいじゃないか

「ミコトさん・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

「ミコトさんの不思議な力をよく理解もしないでいい加減な事を言って本当にごめん・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

「最初は正直、人の死期がわかるなんて信じられなかったけど、今のミコトさんの悲しみ方や苦しみ方を見たら全部嘘じゃないんだって・・・そう思った」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

「もし俺にも見えたらって、そう考えたら辛くて悲しくて胸が凄く痛くなったんだ・・・そうしたら俺はなんていい加減な気持ちでミコトさんの悲しみに触れ、接してきたんだろうって・・・だから・・・ごめん」

何を言ったのか覚えていない、上手く伝わったのかも分からない、でも俺は何一つ飾ることの無い本音を話すうちに涙がポタポタと垂れていた

『もういいんです・・・私も取り乱してごめんなさい』

「ミコトさんが謝る事なんて一つもないよ！ずっと人の悲しみを背負ってきたんだろ？死んで行った人達の事を考えて辛い思いをしてきたんだろ？・・・全然謝る所なんてないじゃないか！」

『悲しいけど・・・辛いけど・・・それが私の使命なのに・・・逃げ出しちゃいけないのに・・・』

彼女は人の死期が見え、その人の悲しみを感じてしまう所為で『自分が皆を救わないと』って念に捕らわれているんだろう
彼女だけがどうしてこんな苦しみを抱えなきゃなんないんだよ・・・
俺は、もし本当に居るのだとしたら彼女にこんな辛い運命を与えた神様とやらをぶん殴ってやりたい気持ちでいっぱいになった。
俺は感情の抑えが利かなくなりそうだったが、彼女の言葉で我に返

った

『私・・・今日はこれで帰りますね・・・本当にごめんなさい』

「え！いや・・・その・・・もうこれっきり会えないのかな？・・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

「ご、ごめん・・・俺変な事言ってるね」

『いいえ、これっきりにはなりません、いずれあなたの元にも・・・』

「え？それってどう言う意味？」

『・・・ではこれで』

答える事なく席を立つ彼女を俺は引き止める事が出来なかった
今引き止めてしまっても結局何も言えないままだと思うし・・・やっぱり俺って最低だな・・・

ふと周りを見渡すと客の数が増えてる、皆一様に俺の方をチラチラと見てる
さすがに無関心な都会人でも女の子を泣かせてる悪者は気になるらしい。
俺は結局飲まれる事のなかったアイスコーヒーの料金を支払い表に出た

「お～い！田中！ちょっと待てよ」

振り返ると悪友その1が居た、
「その1」と言ってるのは、今はこいつと話したくないからワザと思考回路から削除してる訳で
それなのに遠慮なしに話しかけて来るこいつの名前は『松尾一樹（まつおかずき）』
田舎から一緒に上京してきた俺よりちょっと頭の悪い・・・まぁ簡単に言うとバカだな
こいつとは中学の時からの同級生で
まぁ普通の男子がする悪い事の大半はこいつと一緒にやってきた、
そんな悪友その1だ

「ん？松尾か・・・今お前と話したい気分じゃないんだよ」

「いや、友人として、これだけは注意しとかなきゃって思ってだな」

「何なんだよ！」

俺は今一人で落ち込みたい気分なんだよ！注意したい事だと？何か知らんが早く言って素早く去ってくれ！

「お前今そこの喫茶店に居ただろ？」

「あぁ、それがどうしたんだよ！女の子を泣かせてたから注意しに

来たのかよ！言われなくたって自分が悪い事くらい十分わかってるよ！」

「お前、何言ってんの？・・・俺、途中からしか見てないけどさ・・・それでもお前三十分くらいは一人で泣きながらしゃべってただろ？あれ周りの人引いてたからさ止めた方がいいと思うぞ」

人がイライラいてる時にこいつは何笑えない冗談を言ってくるんだよ！彼女がいくら小さいからってそこまで見えない訳がないだろうが！

「何だよその笑えない冗談は！確かに黒い着物だったから目立たないかもしれないけど俺の前にちゃんと和服の女の子が居ただろ！」

俺はそう言い放つとその場を離れた
松尾の奴は店で泣いてる俺と彼女を見て、何か冗談の一つでも言って和ませなきゃって思ったんだろうけど、今の俺には彼女がバカにされてるような気がして聞いてられない。

アパートに戻った後も俺は後悔の念に苛まれ、何をするでもなくジッ天井を眺めていた
あ～あ・・・今度会ったら何て声掛けりゃいいんだよ

考えてるうちに何時しか睡魔が訪れ、俺はそのまま眠っていた

「ん？今何時だ？」

時計を見ると夜の１０時
やばい！無断でバイト休んじまった！電話して謝んなきゃ！
俺は居酒屋の店長に風邪を引いて薬の影響で今まで寝てたと言い訳をした
外を見ると結構まとまった雨が降っている
体中を言いがたいダルさが襲ってる、面倒だから今日はカップ麺でも食べてこのまま寝よう
そう思ってお湯を沸かしていると遠くからパトカーと救急車のサイレンの音が聞こえてきた

（ん？事故か？雨でスリップでもしたのかな？）

ふと頭の中に嫌な予感がよぎった
この事故って死者が出てるのかな？
まさか彼女、この雨の中でも自分が息を引き取らなきゃって追い詰められてるんじゃないだろうな？！
まさか、いくらなんでもそんな事・・・
そう考えるととてもじゃないが落ち着いていられない
俺は雨の中を飛び出してサイレンの鳴る方へと走った
しばらく走ると赤色燈を回したまま停まっている何台ものパトカーが見えた、事故現場だ
そこには物々しい数の警察官が居て道路を封鎖していた、そしてその中に・・・

雨の中、傘もささずに血まみれの被害者の横に彼女は静かに立っていた

伍の語り部　　ー　ヤウヤウ愛ヅ　ー

いくら自分の使命だと思い込んでるとは言え、こんな雨の中をずぶ濡れになりながら一体何を考えてるんだよ！
彼女がここまで追い込まれてるのに俺には何もできない
そう思うと悔しさと情けなさと・・・そして自分に対する怒りが入り混じり、警察官が居るのも忘れ俺は声を荒げてしまった。

「おい、ミコト！何をやってるんだよ！」

『息を引き取っているの』

「それは分かってるよ！お前は今使命感に捕らわれて自分を見失ってる！死者を見送るのも大切だが、ミコト自身が体を壊したりしたらどうするんだよ！」

『・・・でもこれは私の使命だから・・・もし拒絶してしまえば私の存在する意味がなくなってしまう』

その時、近くに居た警察官が一人声を掛けてきた

「君？何を大声を出しているんだ？ここは立ち入り禁止だ、早く帰りなさい」

「あ、ど・・・どうもすいません、彼女と痴話喧嘩しちゃいまして、今連れ戻しに来てたんですよ」

我ながら下手な言い訳だな
警察官が不思議そうな顔で睨んでる、やばい、挙動不審者だと思われたか！

「彼女と痴話喧嘩？それでその彼女は見つかったのか？」

「はい、こいつがそうです・・・ほらミコトも一緒に謝れよ」

俺は愛想笑いをしながら彼女の頭に手をやり警察官にむかってペコリとお辞儀をさせた

「・・・それは何かの遊びかね？それとも私をからかっているのか？」

「え？、からかうって？」

「さっきから君は一人で叫んで、一人でオドオドして、酒でも飲んでるのかね？」

「お、俺酒なんて」

「ここは事故現場なんだ！ふざけるなら他所でやりなさい！不謹慎にも程があるぞ！」

何が何だか分からず、俺は彼女の手を引いて自分のアパートへと走

った
今の真剣な怒り方、警察官には本当に彼女の姿が見えていなかったようだ、そういえば松尾も彼女の姿は見えず俺が一人で話していたと言ってたな・・・
でも俺は今彼女の手を握ってる、夢でも幻でもなく温もりが伝わってきてる

部屋へと入った俺は彼女を見た、その顔は今まで以上に悲しそうな表情をしていた
今俺の中に湧き出している疑問、それを彼女に聞いていいものか
聞いてはいけないような、聞くと恐ろしい答えが返ってくるような、そんな気がしたがこのまま過ごす訳にはいかないだろ

「あの警察官性格悪いよな、冗談にしたって本人を目の前にして見えないフリなんてな！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

「そうだ！さっきは俺興奮しちゃって名前呼び捨てにしてたね・・・ごめん」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

「そうだ、雨でびしょ濡れになってる服を着替えなきゃ！風邪ひいたら大変だもんな」

そう言ってタオルを取りにあがろうとした時だ、彼女の体が淡い光

に包まれ、今まで濡れていた喪服が濡れていない普通の着物へと代わっていた

『・・・私には着替えは必要ありません』

え？何だ今の？イリュージョン？いやそれだったら凄いぞ

「あの・・・ミコトさん？今のって・・・」

『あなたが考えてる通りです・・・私は人間ではありません』

いや！いきなりそんな突拍子もない事考えてないって！せめて「マジシャンです」くらいに抑えておいてよ！
でも「人間じゃない」って・・・そうなると警察官や松尾の奴に姿が見えなかったって言うのは本当だったみたいだな

ん？ちょっと待てよ、じゃあなんで俺には見えてるんだ？
いや見えるどころか声も聞こえるし、手も握れるしちゃんと体温も感じるぞ？
俺は疑問の表情で彼女を見た、それに答えるように彼女は淡々と話し始めた

『私の本当の名前は「アマノツクヨミノカミ」』

「それって確か神話に出てくる名前じゃ？」

彼女は小さくうなずいた

『太陽神「アマテラスオオミカミ」はご存知ですか？私は彼女とは対極にある神・・・』

何か凄い話になってきたけど不思議と俺の中には不信感や違和感は全くなかった
彼女の言う事は全部本当の事、彼女の言葉なら何だって信じられる
なぜか俺の心の中はそんな考えでいっぱいになっていた

『神と言っても私には月の力を借りて死者を黄泉の世界へと導くしかできませんけど・・・』

「ねぇ・・・みんなにはミコトさんの姿って・・・」

『・・・見えていません』

「じゃあ何で俺には見えてるの？って言うかここに存在してるようにしか思えないし」

この問いに彼女の表情は一層悲しみの度合いを増したように思えた
もしかして俺はまた聞いてはいけない事を聞いてるのか？
その時、静かに答えが返ってきた

『私の姿を見る事が出来るのは・・・死期の近い人だけ・・・』

そう言うと彼女は大粒の涙をこぼした
ある程度はそんな可能性も考えたがまさか・・・な・・・

なんだよ、彼女が笑わない原因って俺じゃないか！目の前にいつどんな理由で死ぬのか分かってる人間が居るのにそいつに向かって笑える訳ないじゃないか！

結局俺には彼女を笑顔にするのは無理だったんだな・・・

「なぁ、キミが見えるって事は、俺って最後の息を吸う暇もなく死ぬって事なんだよな？」

『ごめんなさい・・・私にはどうする事も・・・』

彼女は俺の死因や日にちをその胸に秘めて苦しんでるんだな、俺にはもう・・・
いや！
俺にしか出来ない事、死期が近い俺だから出来る事が一つあった

「ミコトさん？」

『はい？・・・』

「俺って何月何日にどんな理由で死ぬのかな？できれば時間も教えてほしいんだけど」

『！！！！』

「寿命や死因が分かるのって辛いよね、分かってるのに何も出来ない、死にたくないって悲しむのが分かってるのに何もしてあげられない・・・かと言って教えてあげても信じないだろうし、仮に信じたとしても自暴自棄になっちゃうかもしれないしな」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

「そんな思いを胸に秘めたまま、その人が死ぬのを待つってどれだけ辛いのか・・・俺なんかの想像を遥かに超えてると思うよ」

彼女は涙をポロポロと流した、やっぱり辛かったんだな
いったい何年もの間、彼女はこんな苦しみを味わってきたんだろう、何とかしてあげたい、俺にはもうそれ以外考えられなかった

「だから俺には隠す必要はないから」

『・・・でも』

「俺はいつ、どんな理由で死ぬのか分かっても絶対に後悔はしないし自暴自棄にもならない！そして最後の1秒まで笑って生きてやる！」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

「最後にミコトが息を引き取りに来てくれても俺は笑っててやる！ミコトに嫌な思いや悲しい思いなんて絶対に渡さない！ミコトに出会えて幸せだったって感謝の思いを伝えてやるから・・・だから一人だけで辛い思いを背負わなくていいから・・・」

『うう・・・・・・』

「・・・って、また呼び捨てにしちゃってたな、ごめん・・・どうも興奮すると俺って言葉が荒くなるみたいだな、しかも神様相手に平凡な人間が何偉そうな事言ってんだよって感じだな、あははは」

『いいえ、今まで何百年と言う時間を過ごしてきたけど、そんな事を言われたの初めてです・・・こんな気持ちになったのも初めてです・・・私・・・嬉しい』

「じゃあ教えてくれるよな？」

最初はまだ戸惑っていたが俺の説得に負けて少しずつ教えてくれたそれによると俺の寿命はあと四十九日・・・、時間は午前九時二十四分、死因は鉄骨の下敷きになるらしい
一ヶ月半か、微妙な日にちだな、と言うか自分の寿命と死因を聞いたのにどうしてこんなに落ち着いていられるんだろう？恐怖感とかは嘘のように感じない、代わりに残りの寿命の全てを彼女の為に！
そんな思いが広がった
平々凡々と過ごしてきた俺の人生、もしかしたら最後の四十九日が一番輝くのかもしれないな

「ねぇ、ミコトさん？」

『・・・ミコトでいいですよ』

「へ？」

『さっき呼ばれた時嫌な感じはなかったです、むしろ心地よかったですから』

「えっと・・・じゃあこれからはミコトって呼ぶね」

『はい、私も浩二さんって呼びますから』

そう言った彼女の顔は少しだけ優しい笑顔になっていた、その顔を見られただけで俺は幸せな気分になった

「ところでさ、ミコトってどこに住んでるの？」

『私の姿は普通の人には捉える事ができませんから「住む」と言う概念はありませんけど・・・もし良かったら・・・ここに居てもいいですか？』

え！何？今何て言った？
いきなりこんな事を言うなんてよほど俺が言った言葉が嬉しかったんだろうけど、いいのか？

「俺は別にいいけど・・・」

『ありがとうございます浩二さん』

こうして他人には見えない神様との、しかも四十九日間って期限付きの奇妙な同棲生活が始まったわけだ。

陸の語り部　　ー　イラヘヤハ　アラム　ー

小鳥がさえずる気持ちのいい朝
俺は生まれてから一度も味わった事の無い幸福感に包まれて目覚めの時を迎えていた

『あ・・・おはようございます浩二さん』

台所に立つ割烹着の彼女、お味噌汁とご飯のいい香り、優しく耳に流れてくる声
平凡な俺の脳味噌で考えられる全ての幸せを一度に味わっているようなこの感じ、もう死んでもいい・・・
って４８日後には死ぬんだけど、それでもやっぱり死への恐怖はなかった
それだけ今の俺の心は彼女の事でいっぱいなんだろうな

それにしても彼女の作る朝ご飯は美味しい
いや！そんなありきたりの言葉で表現するのはご飯に失礼だと思えるくらい美味しい！

「この朝ご飯凄く美味しいよ」

『お口に合うようでよかったです』

「ミコトって料理上手なんだな」

『うふふ、伊達に何百年も過ごしてきてませんから』

冗談交じりに微笑む彼女を見ると本当に心が満たされる、もうこのまま何もしないで安堵感に身をゆだねたい
だがそう言う訳にもいかないので俺は朝食を食べ終わると大学へ行く準備をした
何でもうすぐ死ぬのに勉強なんてするんだよ？って声が聞こえてきそうだが、死期を知っても自暴自棄にならないってのが約束だし、何より普段通りに過ごすのが彼女が悲しまない選択肢だと思うしな

「じゃあミコト、行ってきます」

『はい、いってらっしゃい浩二さん』

いいなぁ～！ドラマや何かではよく見るけど送り出してもらうのがこんなに気持ちのいい事だとは思わなかったな思わず顔がニヤニヤしちまう。
だめだこのままだと電車の中で変態や痴漢と間違われそうだ

「おい・・・田中・・・」

「ん？松尾か！お～っす」

「独り言の次は思い出し笑いか？お前最近気持ち悪いぞ」

ふん！何とでも言え！
俺は人類の歴史が始まって以来、今まで誰も味わう事の無かった幸せを感じているんだ！この満ち足りた幸福感がお前にわかってたまるか！

「そうそう、俺の知り合いがお前と話がしたいって言ってるんだけど」

松尾の知り合い？こんな言い方をするって事は俺の全く知らない奴だと言う事だな
俺自身あんまり人付き合いのいい方じゃないが、まぁ松尾の知り合いなら悪い奴じゃないだろ

「別にいいよ、どこで待ち合わせすればいい？」

「お前の都合に合わせるって言ってたけど、今からでもいいか？いいなら電話するけど」

この後は講義まで少し時間もあるし、簡単な話くらいなら何の問題もないだろう
松尾は相手に電話を掛けると駅前の喫茶店で待ってるように支持した
駅前？ミコトと行ったあの喫茶店か・・・よくよく考えたら彼女の姿は誰にも見えてなかった訳だから店員は俺の事『独り言を言いながら泣いてる変な男』って思ってたんだろうな・・・
今から行くけど誰も俺の事を覚えてませんように・・・俺は何度も祈った

「いらっしゃいま・・・せ・・・・」

絶対覚えてるよ・・・『またあの変な客が来た』って目で見てるしまぁキチンとお金も払った訳だし、何も卑屈になる理由はない！俺と松尾は奥の席に向かった

「松尾君、こっちこっち」

は？松尾の知り合いって女の子なのかよ！
こいつも俺と同じで女の子に声を掛けた事なんか無いって思ってたのに・・・いつの間に・・・
ってかどう言う関係なんだ？

ははぁ～ん分かった！、自慢だな！こいつ恋人が出来たって自慢したいんだな！
お互いが女の子には絶対にモテない部分を理解し、彼女居ない遍歴を知り尽くした仲だ、俺が羨ましがると思ってるんだろうな
だが、お生憎様！俺の心はもうミコトのお蔭で満ちたりで居る、今までの俺とは一味違うぜ！

「なんだよ、俺と話がしたい人が居るなんて回りくどい言い方しなくてもいいのに・・・あれだろ？！気付かれないように呼び出してビックリあんど自慢大会開催！って魂胆だったんだろ！」

「はぁ？お前なに言ってんだよ」

「何って彼女が出来た自慢じゃないのか？」

「違うよ！・・・こちらは『川上（かわかみ）　蓬（よもぎ）』さん、サークルで知り合ったんだけど、どうしてもお前と話がしたいって言うから」

結構可愛い子だな・・・話がしたいって事は、俺の事知ってるのか？ん～・・・こんな可愛い子だったら記憶に残らない訳ないんだけどな？全然わからん

「あの・・・はじめまして、川上蓬と言います」

「あ、はい、田中浩二です、よろしく」

それより松尾の奴、何のサークルに入ってるんだ？そんな話一度も聞いた事ないぞ
こいつの事だからＡＶ鑑賞サークルとか言うんじゃないだろうな・・・ってかそんなサークルの女の子紹介されても困るぞ・・・

「松尾君とはパソコンのサークルで知り合ったんですけど、田中さんのお友達だって聞いたので是非紹介してくださいってお願いしたんです」

「えっと、俺の事前から知ってたの？」

「はい！半年くらい前からずっと気になってたんです」

驚いたな・・・数多くの男性の中から平凡な俺を選び、話がしたいって？
それはかなり特殊な趣味と言うか、とにかく変わった子に違いない

「気になってたって何が？俺なんか平凡すぎて気になるようなとこ無いでしょ？」

「松尾君から聞いた通りですね」

ん？松尾の奴いつも俺の事を何か言ってるのか？いったいどんな悪口を言ってるんだ？

「田中さんっていつも自分の事平凡だとか普通だとか言ってるみたいですけど、それって自分の魅力を知らなさすぎですよ」

「はぁ？魅力？？」

やっぱりこの子おかしい・・・いい眼科を探してあげないと！
ふと見ると松尾が右手を上げながらフェードアウトして行ってる・・・おい！それは何の冗談だ！
その嫌らしい笑顔は、『邪魔者は消えますよ～あとは二人で話してちょ～だい～』って意味なのか？なんか無性にムカつくぞ！ってか殴っていいか？

「田中さんの魅力は、さり気ない優しさに溢れてる所ですよ」

(何を言ってるんだこの子は・・・まったく分からん)

「私が始めて見たのは半年前でした、雨の日に校舎の裏で子猫に傘を立てかけてましたよね?その後自分は濡れて走っていって」

「ん〜・・・確かにそんな事あったような気がするけど、猫好きだったら当たり前じゃないか?」

「その後いつだったか猫が車に轢かれて死んでいた時、その猫を校舎の裏に埋めてあげて手を合わせてたでしょ?」

「あ〜、それは覚えてるな、でもそれも当たり前だろ?あのままにしてたら何度も轢かれちゃう訳だし、可愛そうだろ?」

「その時近くにいたお友達が『うぇ!よくそんなの持てるな!そんなのほっときゃ誰かがやるのに!』って・・・その後に田中さんが言った言葉が忘れられなくて」

そいつの言葉は覚えてる、だけどその後俺は何て言ったっけ?そんな凄い事言った覚えないんだけどな?

「田中さん笑いながら『あはは、じゃあ俺がその【誰か】なんだな』って・・・」

「それってそんなに凄い言葉か？」

「ほら、それが田中さんのさりげない優しさですよ」

「はぁ？」

「女の子の前で格好をつけたいから優しい人のフリをする、優しい言葉だと意識して話す、そんな男の人はたくさん見てきました・・・でもそれが優しい事だと意識する事もなく、当たり前だと思って自然に出せる人なんて私初めて見ました・・・」

これってどう言う事だ？そんな事くらいで俺の事が好きになったとか言うのか？
もしかして・・・死ぬ間際にモテ期到来？それはあんまりだぜ神様！

「それから何度も田中さんの優しさを見かけるうちに・・・その・・・す・・・好きに・・・」

「え～っと・・・」

「だから良かったら私とお付き合いしてください！」

やっぱりモテ期キターー！告白されたのなんて生まれて初めてだよ！どうするどうする！俺どうしたらいい？！

あ・・・

そうだ・・・

「えっと・・・何て言ったらいいのか・・・」

よく考えたら俺はあと４８日で死ぬんじゃないか・・・そんな男と付き合ってどうするんだよ・・・

いや、断る理由はそれじゃないな・・・

今、俺の中でミコトの悲しい顔が見えた、

「ごめん・・・その・・・嬉しいんだけど・・・本当に嬉しいんだけど」

「ダメ・・・なんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしてですか？松尾君の話だとお付き合いしてる女性は居ないって・・・そう聞きましたけど？」

「付き合ってる・・・と言えるのかどうか分かんないけど・・・悲しませたくない人が居るんだ」

「付き合ってないんですよね？じゃあ片思いなんですか？・・・だったら私と付き合ってみてもいいじゃないですか」

「俺の勝手な思い込みかもしれないけど・・・でも彼女を裏切るような事はできないんだ・・・」

「その人の本心を聞いた事はないんでしょ？私の方が絶対に田中さんの事を愛してます！だから！」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「彼女はずっと笑えなかったんだよ・・・ずっとずっと辛い事をして来て笑顔をなくしてたんだ」

「何の話をしてるんですか？」

「それがやっと笑顔になる事が出来たんだ・・・だからその笑顔を壊したくないんだよ」

「だったら黙ってたらいいじゃないですか！男の人だったら普通にやってる事じゃないんですか？」

「・・・・・・ダメだって・・・そんな事言っちゃダメだって・・・知り合ったばかりだけど・・・君がそんな事を言う、そんな子だって目でみたくないよ・・・」

俺って女の子に対して酷い事を言ってるよな・・・でもこの子もミ

コトも両方が笑顔になれる、そんな都合のいい答えなんてあるのか？
そんな少女漫画みたいな綺麗な答えなんて実際にあるのか？
そんな答えなんて無い・・・そう俺は思う
だったら選ぶべき選択肢は一つしかない

「好きだって言ってくれたのは本当に嬉しいよ、俺だって男なんだし正直たくさんの女の子とお付き合いしたいと思うし色んな事したいって思ってるよ」

「だったら・・・」

「でも・・・俺が他の女の子と付き合うって考えると、俺の頭の中の彼女が悲しい顔になるんだよ・・・他の子と付き合う、でも彼女の笑顔も壊れない・・・そんな都合のいい事なんて無いよな、だったら・・・どちらか一方しか選べないんだったら」

「いや！その先は聞きたくありません！」

「・・・彼女の笑顔を守りたい」

「酷いです・・・」

「分かってる・・・酷い男だって言うのは分かってる・・・でも・・・ごめん」

俺は頭を下げ平謝りする事しか出来なかった、もうその子の顔をまともに見る事すら出来ないで謝り続けた

「もういいですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「やっぱり田中さんって優しすぎです・・・自分が楽しむ事だけ考えたら・・・黙ってるだけで済むのに」

「だから、それは・・・」

「優しくて、不器用で、それで卑怯です・・・そんな事言われたら引くしかないじゃないですか」

「ごめん・・・」

「その人が羨ましいです・・・私の方が先に会ってたらその優しさを独り占めできてたのに」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「今日のところはこのまま帰りますけど・・・まだ諦めた訳じゃないですからね！べ～！」

舌を出してそう言うとこちらを振り返る事なく走り去ってしまったやっぱり傷つけてしまったんだろうな・・・でも、今の俺にはミコトの笑顔が全てだ
彼女の笑顔を守る為には正しい選択だったんだ・・・俺は何度も自分に言い聞かせた

漆の語り部　　一　君ニ誓フ　一

「はい！それじゃお先に失礼します」

ふぅ～、バイトも終わったし帰るとするか！
今までは一日の終わりって全身疲れ果てて気分が重かったけど、今日の俺の気分の何と軽やかな事か！
家に帰れば誰かが待っててくれる、たったこれだけの事がこれほど嬉しいとはな、しかもその待っててくれる相手が、神様とは言え可愛い女の子なんだから俺の顔の筋肉はさっきから緩みっぱなしだ。

バイト先から家までがあっと言う間に感じた、まるでテレポートしたかのように一瞬だったな・・・ってそれは大袈裟だけど。

「ミコト～、ただいま～」

『おかえりなさい、浩二さん』

玄関を開けるとそこには彼女の優しい笑顔があった、やっぱりこの笑顔は何よりも優先して守らなきゃな。

『晩御飯の用意はできてますよ、少し冷めちゃったから今温めなおしますね』

「うん、ありがとう」

やっぱり彼女のご飯は美味しい、今まで俺が自炊してきた物と同じ材料を使ってるのに、どうして出来上がった物がこんなに違うんだ？

って言うか俺は今まで材料をゴミに変えていたんだな・・・すまん！食材よ！ナムナム～・・・

「ごちそうさま、ふぅ～、おなかいっぱい満足だ～」

『はい、おそまつさまでした』

鼻歌交じりで食器を洗う彼女の背中・・・このまま何時間眺めていても飽きる事はないだろうな。

ん？・・・今更気が付いたけど部屋の中がやたら綺麗になってるな？彼女が昼の間に掃除してくれたのかな？

「ねぇミコト？部屋の中って掃除してくれたの？」

『はい！少しでも浩二さんが気持ちよく過ごせたらって思って・・・もしかしていけませんでしたか？』

「いやいやいや！いけないなんて事全然ないって！すっごい汚れてたから大変だったんじゃないかな～って」

『私お掃除とか好きですから、やりがいがありましたよ』

へぇ～、家庭的でいいよな～・・・

は！ちょっと待て！俺は今大事な事を忘れてないか？！

ここまで綺麗に掃除をしてるって事は、当然押入れの下段に無造作に入れておいたマル秘コレクション全３０冊は・・・

俺はソ～っと押入れの戸を開けて見た。

はう！やっぱり整理されてる！・・・しかもタイトル別に揃えてあるよ・・・

何も言わないけど「男性なら仕方のない事ですよ」って事なのかな？

・・・若い女の子に見えてもこう言う所は悟りを開いてるよな。

「ミコト・・・押入れの・・・」

『はい？』

この話題は引きずれば引きずるほど気まずくなりそうだ・・・もう触れるのはよそう・・・

「いや、え～っと・・・そうそう！明日は日曜日で大学休みだからさ、どこかに遊びに行かない？」

『え？本当ですか？うれしい！』

「どこか行きたい所とかある？」

『誰かと遊びに行くなんて、今まで考えた事もなかったのでよく分かりませんけど、浩二さんと一緒でしたらどこでも構いませんよ』

そうか・・・そうだよな。

今まで誰かの息を引き取り続けてきて、しかも自分の姿が見えるのは死期の近い者だけ・・・何かを楽しむって事自体、経験した事ないんだろうな・・・

「じゃあ海の近くにある水族館にでも行ってみる？」

『はい！じゃあ明日はお弁当作りますね』

本当に嬉しそうな顔で笑うよな、こんなに喜んでくれと俺まで嬉しくなる。

なんて緩やかで幸せな時間なんだろう・・・

「じゃあ、明日に備えてそろそろ寝るとするか」

『はいお布団の準備しますね』

変な想像されると困るから先に言っておくが、彼女は俺が今まで使ってたベットに、そして俺は離れた所に布団を敷いて寝てるから何もやましい事はしてないぞ！本当だからな！

でも別にそう言う事に興味がないって訳ではないぞ、そっち系の趣味って訳でもないから勘違いしないように。
って俺は何を考えてるんだか・・・

『おやすみなさい浩二さん』

「あ、ああ、おやすみ」

でも彼女は俺の事どう思ってるんだろう？・・・

そもそも彼女の事が見える男性ってのが少ない訳だし、俺みたいに見えたとしても、それは近いうちに死ぬって事だし・・・何百年と時間を過ごしてきて誰かを好きになった事あるのかな？
優しい声を掛けられたのは初めてって言ってたけど、それって悲しい事だよな・・・

『スー・・・スー・・・』

もう寝ちゃったのか。
なんて無防備な寝顔なんだよ・・・こんな寝顔見せられたら何もできないって・・・

おやすみミコト・・・俺が生きている間はミコトに悲しい思いはさせないからな・・・

捌の語り部　　一　天命ニ抗エズ　一

ふぁあぁ～、良く寝た～
窓の外は太陽の光で照らされ始めてきてる、天気予報でも晴れるって言ってたし、今日は楽しい一日になりそうだな。
台所を見るとミコトが楽しそうに料理をしている、包丁が軽快なリズムを奏で実に心地よい。
このままずっとまどろみの時間を味わっていたい気分だ。

『あ、起こしちゃいましたか？ごめんなさい、静かに作ってたつもりなんですけど』

「・・・・・・・・・・・・・・・」

『浩二さん？　どうしました？』

「え？　いや、ミコトの後姿が可愛いなって思って・・・」

何言ってるんだよ俺！まだ脳が活動してないから思った事がそのまま口に出ちゃったよ。

『え？　あ、あの・・・ありがとうございます・・・』

彼女は耳まで真っ赤にしてまた料理をし始めた。
覗きこむと凄く豪華なオカズが重箱に詰められていた、そう例え

るなら一流ホテルで売ってるお正月のお節くらい・・・いや、それ以上かもしれない。

「ミコト、それ今日のお弁当？」

『ええ、一生懸命作ったので楽しみにしてて下さいね』

見れば見るほど美味しそうだ、俺は思わずオカズの一品を摘んで口に運んだ。

『あ！　朝ご飯はちゃんと別に作ってますから摘み食いはダメですよ～！』

頬を膨らませて怒る顔も可愛い、

「お！　これ美味しいね、お昼になるのが楽しみだな」

『うふふ、私も楽しみです』

さて、朝ご飯も食べたし出かけるとするか。

そうそう、俺は前から少し気になっていた事を彼女に問いかけてみた。

「なぁ、ミコト」

『なんですか、浩二さん？」

「ミコトってさ、服はその和服しか着ないのかな～って」

『別にそう言う訳ではありませんけど、なんとなくこの方が落ち着くと思って・・・変ですか？」

「いや、全然変じゃないんだけど、何て言うか、その、洋服姿も見てみたいなって・・・」

うわぁ～！恥ずかしい事言っちゃたよ！
でもいいよな？何たって今日は俺にとって初デートなんだからこれくらいの願望はいいよな？

『浩二さんが願うのでしたら・・・』

そう言うと彼女の体がうっすらと光に包まれ洋服姿に変った。
やっぱり思った通りだ、洋服姿も凄く似合っているし可愛い、しかもこの姿は俺しか見る事ができないんだもんな、あぁ何と言う幸せ！

水族館は電車に乗って３０分くらいの所にあって日曜日は結構込んでいたりする人気のデートスポットだ。
周りから見たら俺は、一人で重箱を抱えて、一人で水族館へ入っていく悲しい男に見てるんだろうが、そんな事、今の俺にはこれっ

ぽっちも気にならない。
ミコトの笑顔の前にはどんな事も取るに足りない事である。

「さぁ入ろうか？」

『はい、何だかワクワクしますね』

ミコトは本当に水族館が初めてなんだな、小学生の様にはしゃぐ姿はとてもじゃないが神様には見えない。
近くの公園でお弁当を食べた後、俺達の周りにはのんびりとした時間が過ぎて行く。

「ちょっとあそこのお土産屋さん覗いてみない？」

『えぇ、面白そうですね』

建物へ繋がる広場を歩いていると不意に彼女が俺の腕にしがみついてきた。
な・・・なんだこの展開は？　イベント発生か？

『浩二さん、気を付けてください・・・』

「どうしたの？」

『この中に二人、私が息を引き取らないといけない人がいるんです

けど・・・』

しまった！　俺は何てバカなんだ！
人が多ければそれだけ事故死をする人に出会う確立が増えるじゃないか・・・どうしてこんな事に気付かなかったんだよ。

「ごめん・・・人混みに連れて来なかったら気付く事もなかったのに・・・」

『いいえ、これが私の使命ですから浩二さんは気にしないで下さい』

「なぁ、どうしてもミコトが息を引き取らなきゃダメなのか？」

俺はミコトに悲しい思いをしてほしくない、死んで行く人には悪いが見て見ぬふりが出来るなら・・・息を引き取らなくてもいいなら・・・そんな事を考えていた。

『ねぇ浩二さん？　ヤオヨロズノカミって知ってますか？』

「確か『八百万神』だっけ？」

『えぇ、昔から日本には私も含め多くの神が存在するんです』

「うん、でも西洋の神様なんかに比べたら桁違いに多くない？」

『それは自然に有るもの、現象、全てに神が宿ると考えられてたか

らなんです・・・太陽が輝いているのも、月が光っているのも、雨が降るのも、草が生えるのも・・・それぞれ役割を与えられた神がやっているって・・・そう考えられてたんです』

「ふーん、確かにそれじゃ多くなるのも無理ないよな」

『空気でさえ神として祀られていますからね』

「そうなんだ?!」

『私達は人間の思想によって生み出されました・・・自然を敬う人間によって、それぞれが一つの役割を与えられて・・・』

「うん・・・」

『私の場合は、黄泉の国と繋がってるとされる月の力を借りて迷っている死者を導く事・・・それ以外には何も出来ません』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『だからそれを拒否してしまうと、私は私でなくなるし、存在する意味もなくなってしまうんです』

悪かった・・・本当に悪かった、考え無しに何でも聞くのは今後一切止めろ！　反省しろ俺！

「本当にごめん」

『いいえ、いいんですよ、それよりも私がさっき気を付けて下さいって言ったのは・・・』

「何か特別な事でも見えたの？」

『これだけ多くの人の中で二人だけ、同じ時刻に同じ理由で死亡するんです』

「それってどう言う事なんだ？」

『今から十七分後、死因はナイフによる刺殺・・・つまりこの広場に通り魔が出没するんだと思います・・・だから浩二さんは巻き込まれないように気を付けてください・・・』

十七分後だって？　なんとか出来ないのか？

よく考えろ・・・ミコトは使命を帯びてるから何も手出しできない、だったら俺の手で回避出来たらいいんじゃないのか？　でも直接注意しに行っても変人扱いをされるのがオチだし。

ちょっと待てよ、俺が死ぬのはあと四十七日先だよな？　それって逆に考えれば四十七日間は絶対に死なないって事なんじゃないのか？　そうだよ！　だったら俺が襲われる人の盾になって犯人を捕まえればいいんじゃないか！

「なぁ、襲われる人ってのはどの人なんだ？」

『それを聞いてどうするんですか？』

「いいから教えて！」

ミコトの説明によると、右前方を歩いてる赤いバックの女性と、その隣の子供が狙われるらしい。

一体犯人はどこから来るんだ？

あと五分・・・怪しい奴は居ないか？　よく見るんだ！

あと一分・・・まだ犯人らしき人物は見えないが、俺は女性の方へと近付いた。

「うわぁあぁぁあぁぁあ！わかれるくらいなら殺してやるぅぅぅぅ！」

前から歩いて来た男がそう叫ぶと紙袋の中からナイフを取り出した。

俺はここでは死なない、だから勇気を出せ！　あいつを止めるんだ！

男の前に立ちはだかり身構える俺にナイフが振り下ろされた。

「邪魔だ！　どけぇ！」

男を捕まえようと伸ばした右手に熱い感覚が走り、俺はそのまま

横に押し倒された。

後ろを振り向くと男は・・・

女性と子供にナイフを突き刺していた・・・

止める事が出来なかった・・・この時間に死ぬと分かっているのに助ける事が出来なかった・・・

ミコトは・・・ミコトはこんな辛い思いを何百年もしてきたと言うのか

『浩二さん大丈夫ですか？！』

「あぁ・・・俺は大丈夫だけど・・・女性と子供は助けられなかった・・・」

『腕から血が出てるじゃないですか！　どうして・・・どうしてこんな無茶をするんです！』

右腕が痺れると思ったら切られてたんだ、でも腕の痛みより今はミコトの泣き顔を見るほうが数倍心が痛い・・・

「ごめん、二人を助ける事が出来たらミコトは息を引き取らなくて済むと・・・悲しみを受け取らなくて済むと・・・そう思ったから」

『死を回避する事なんて誰にも出来ないのに・・・』

「俺はあと四十七日間は死なないから・・・だから助けられるとと思ったんだけどな」

『死ぬ事はなくても怪我をすれば痛みや苦しみは襲ってくるんですよ！　お願いですからこんな無茶な事はもう止めて下さい』

結局俺はミコトの悲しみを増やしただけなのか・・・大馬鹿野郎だな・・・

彼女は二人の息を引き取った後、俺の腕の中で泣いた。

「ごめんな・・・何もできなくて」

平凡な生活を送ってきた俺に何かが出来るなんて、そんな自惚れた考えを持ってる訳じゃないが、今日ほど自分の無力さを感じた事は無いな・・・情けない

『いいえ、今までは一人で悲しみを受け取って来ましたけど今は違う・・・浩二さんが傍に居てくれるだけで辛さが和らぐような気がします』

「だったら俺が生きている間は・・・短い間かもしれないけど、俺が死ぬその時までは傍に居て一緒に悲しみを受け止めてあげるから・・・」

俺は左腕に力を込めてミコトを抱きしめた。

玖の語り部　　ー　キヨラナリ郷　ー

ピロロロロロロー♪ピロロロロロロー♪

ん？　誰から電話だろ？

開いた画面には俺の携帯に唯一登録されている女性の名前が表示されていた。

そう・・・母親だ・・・

俺だって女の子の名前で電話帳機能をパンクさせたいけど、まず声が掛けられないんだからしょうがない。

「もしもし、何？」

【何じゃないわよ、お正月も帰ってこないで、ちゃんとご飯食べてるの？】

「ちゃんと食べてるよ」

そりゃ以前は面倒って理由で食べなかったり、食べてもコンビニの弁当だったり、カップ麺だったりしたけど、ここ数日に至っては見た目も栄養も文句の付けようの無いミコト特性のご飯を食べてるからな、決して嘘はついてない。

「そんな事言う為に電話掛けてきたのかよ？」

【ううん、おばあちゃんがね風邪をこじらせて、浩ちゃんは？　浩ちゃんは？　って言うから声だけでも聞かせてあげようと思ってね・・・今代わるから】

「もしもし、ばあちゃん？」

【浩ちゃんかい？　体は大丈夫かい？】

「何言ってるんだよ、風邪ひいてるのはばあちゃんの方だろ？　大丈夫なのか？」

【おばあちゃんは大丈夫だよ、それより、浩ちゃんいつも幼稚園で苛められてたから心配で】

「な、いつの話してんだよ？　俺もう大学生だぞ」

【浩ちゃんの顔が見たいねぇ～、今度はいつ帰って来てくれるんだい？】

そう言えば、ばあちゃんの顔ってもう半年以上見てないな、正月も面倒だからって帰らなくて、結局部屋でゴロゴロしてたもんな・・・

「今度の夏休みには必ず帰る・・・」

って、そうか・・・俺は夏休みにはもう居ないんだよな・・・

このまま家族に顔も見せないままってのは、どう考えても駄目す

ぎるだろ。

「ばあちゃん、明日帰るから、顔見せに行くから楽しみに待っててよ」

【本当かい浩ちゃん？　おばあちゃん待ってるからね】

「あぁ、必ず帰るから」

【ちょっとあんた、おばあちゃん「待ってる」とか言ってるけど帰って来る気？　学校は？】

「ばあちゃん風邪ひいてるんだろ？　一日や二日休んだって大丈夫だって」

【そりゃ、おばあちゃん喜ぶだろうけど、本当に大丈夫なのかい？　帰ってきたら電車賃あげるからちゃんと言うんだよ】

「いいよ、もう子供じゃないんだから、じゃあ明日帰るから」

いつでも帰れる、そう思えるのは実は当たり前の事じゃなかったんだな。

俺はまだ死期を知ってるからこうやって帰れるが、知らなかったら最後に家族に会う事も出来なかったわけだし、そうやって考えると死期が分かったのはいい事だったな。

そうだ、ミコトにも俺の家族を紹介しよう、まぁお袋達には見えないけど、それでも是非紹介したい。

「ミコト、明日実家に帰るんだけど一緒に来てくれるだろ？」

『え？　えぇ構いませんけど』

「よし、じゃあ決定だ！　明日はミコトに俺の家族を紹介するから」

俺の実家はアパートのあるこの町から電車で三時間半くらい掛かる、まぁ簡単に言えば田舎だな。

そうだ、切符はどうしよう？　ミコトは他の人には見えないから本来なら買う必要はないんだけど、そうすると誰かがミコトの居る席を空席だと思って座って来るかもしれないし、うん、二人分買うとするか。

あとバイト先にも電話しとかないとな・・・

「俺の実家って少し遠いんだ、だから明日は早めに出かけるから」

『はい、わかりました』

その日はいつもより早めに就寝して明日に備えた。

―　翌日の朝　―

『おはようございます浩二さん』

「おはよ～ミコト」

『朝ご飯はどうしますか？　すぐに用意できますけど』

「後片付けが大変だろうからいいや、駅で何か食べよ」

外はまだ薄暗かった。

ミコトと手を繋いで歩く道は人通りが少なく、駅に着くまで二人だけの空間・・・幸せだなぁ～。

時間に余裕をもって出てきた筈だが、知らず知らずに手を繋ぐ幸せに酔いしれてたようだな・・・歩く速度が遅くなってたようで駅に着いたのは電車の時間ギリギリだった。

電車は定刻通りホームへと入ってきたのだが俺とミコトは慌てて乗り込む形になってしまった。

え～っと席はどこだ～・・・あったあった。

窓側にミコトを座らせて俺は通路側に座る事にした、荷物を網棚に置いて一息ついた所で俺は重大な過ちに気がついた。

「あ・・・弁当買うの忘れた・・・」

あまりにも慌ててたから売店に立ち寄るの忘れてた・・・仕方が無い三時間半の辛抱だ・・・三時間半・・・長いなぁ・・・あぁ腹減った・・・。

『浩二さん？　よかったらおにぎりがありますよ』

「え?！　どうして?」

『うふふふ、こんな事もあるかもしれないと思って作っておいたんです』

さすがミコト！　俺はおにぎりを手に取り頬張った。

う・・・旨い・・・

これで三時間半の旅は至福の旅へと変った。

駅から家までは歩いて四十分程掛かるが、通り道の小学校や雑貨屋、俺の思い出の場所をミコトに教えたかったのでバスには乗らず歩いて行く事にした。

「何も無い所で驚いただろ、でも空気も水も清らかで美しい・・・それが唯一の自慢だな」

『ここの風景は大昔に私達が居た場所に似ていてとても落ち着きます』

考えたらミコト達が生まれた時代の日本って、ここなんか比べ物にならないくらい何も無かったんだろうな、もしかしたら現代の方が住みにくいんじゃないかな?

「ここが俺の通ってた小学校、隣が中学校、生徒の数が少なかったから先生とは結構仲が良かったんだぜ」

『へぇ～、浩二さんの小さい頃の姿って可愛かったんでしょうね』

「可愛いって言うか、まぁ普通の子供だったな、家に着いたらアルバム見せてあげるよ」

『本当ですか？　楽しみです～』

子供の頃は駅から家までが遠く感じて嫌だったが、今はあっと言う間に着いた気がする、まだまだ話したい場所や思い出がいっぱいあるのに、もっと歩いていたい、俺はそう思っていた。

「ここが俺の生まれ育った家だよ」

玄関を開けようとすると中から弟が飛び出してきた。

「それじゃ丸谷の家に行って来るから・・・と、兄ちゃん！」

「よぉ、元気にしてたか？」

「お母さ～ん！　兄ちゃん帰って来てるよ！」

『元気な弟さんですね』

「あぁ」

俺とミコトは顔を見合わせて笑った。
暫くすると母さんとばあちゃんが出てきた、あれ？　ばあちゃんってこんなに小さかったか？
その時ばあちゃんが思いがけない事を口走った。

「浩ちゃん？　そのお嬢さんはお嫁さんかい？」

「え？」

「浩二、あんまり気にしないで、おばあちゃん最近少しボケが始まってて、たまに変な事言うから」

いや待て・・・ばあちゃんもこの年だから多少ボケるのは仕方ない、でも今『お嬢さん』って言ったよな。

「なぁ、ばあちゃん」

「何だい？」

「ばあちゃんに見えてるお嬢さんってどんな子？」

「浩ちゃんったらおかしな事言うね、自分の横に居るのにどんな子って」

「いいから教えてよ」

「背は浩ちゃんの肩くらいで、黒い髪が長くて綺麗だねぇ～、まるでお人形さんみたいだよ」

間違いない・・・ばあちゃんにはミコトが見えてる、どう言う事だ・・・

俺が視線を移すとミコトは小さくうなずいた。

「へぇ～、浩二はそんなか可愛い彼女を連れて帰って来たんだ」

「兄ちゃんその人って義姉さんになる人なのか？」

このバカ弟にバカお袋！　あんた達には見えないからばあちゃんがボケたと思って適当に話を合わせてるんだろうが、隣にはミコトが居るんだから空気読めよ！・・・ってそれは無理か・・・

「ごめんな、バカな家族で、こいつ等の言う事なんて気にしなくていいかなら」

俺はミコトの手を引き、かつで自分が使っていた部屋へと上がった。

「なぁミコト、ばあちゃんってミコトの姿が見えてたよな？」

『えぇ、見えていました』

「それって、やっぱりあれだよな・・・」

『死期が近いです・・・でも死因は老衰です、私が息を引き取る必要の無い安らかな死が待っています』

「え？！　そうなの？　良かった・・・」

死ぬのが分かってるのに良かったって言うのも変だけど、ミコトもばあちゃんも悲しい思いや辛い思いをしなくて済むなら、やっぱり良い事なんだよな。

「で、それっていつなの？」

『あと六十日後になります』

六十日・・・俺よりも後なのか・・・

お袋も大変だな、俺の葬式を出した二週間後にばあちゃんの葬式だなんてな、考えたら凄い親不孝だよな。

まぁ自殺じゃないから許してくれ、この通り。

俺はお袋が居るであろう台所の方に向かって頭を下げた。

「浩ちゃん、いいかい？」

「ん？　ばあちゃんか？　いいよ入って」

扉を開けるとばあちゃんがお茶とお菓子を持って立っていた。

「ばあちゃん、風邪引いてたんじゃないのか？　起きてて大丈夫なのか？」

「浩ちゃんの顔を見たらスッカリ良くなったよ」

「無理しないで寝てなきゃダメだって」

俺が帰って来たのがそんなに嬉しいのかよ、こんな事ならもっと頻繁に帰ってきてたら良かったな。

「お嬢さん何て言う名前なの？」

『はい、月読ミコトと言います』

「ミコトさんは浩ちゃんの事が好きなのかい？」

ブッ！・・・ばあちゃんいきなり何をいいだすんだよ！　盛大にお茶を吹き出しちゃったじゃないかよ！

「もう、浩ちゃん何してるんだい？　浩ちゃんは小さい頃から落ち着きがなくてねぇ」

『そうだったんですか？』

「って何ミコトに話してんだよ！」

「何って、浩ちゃんのお嫁さんになるんだから小さい頃の事を教えてあげようと・・・」

「いいからいいから！　そんな事教えなくていいから、ミコトも聞きたくないよな？」

『え？　私はもっと聞きたいですけど？』

う・・・まさかの裏切り・・・

またばあちゃんが勢い良く話し出したよ・・・そもそもばあちゃんボケてきたんじゃないのかよ？　何でそんなに昔の事を明瞭に覚えてるんだよ！

「それで浩ちゃんが幼稚園の時に・・・」

『うふふふふ、そんな事が』

もう止めてくれ・・・う〇ちを漏らしたのは過去の俺であって今の俺じゃないんだ・・・

「あと小学校の時は・・・」

や～め～ろ～！　女の子のスカートをめくって泣かせた罰として親父に裸で玄関前に立たされてたのも過去の事だ、もう忘れろ忘れろ忘れろ！

ってか、ばあちゃん・・・いつまで思い出話続ける気だよ・・・

拾の語り部　　ー　ウラモトナシ　ー

「で、浩ちゃんがね・・・」

おぃ・・・前回からまだ思い出話が続いてるのかよ！
しかも今度はアルバムまで持ち出して写真付きで解説を始めたぞ、
実はボケたって言うのは嘘だろ？

『うふふ、この写真の子って浩二さんなんですか？　可愛い～』

「この時の浩ちゃんは・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

分かった・・・もう何も言わないから好きにしてくれ・・・

「俺、下に行くからゆっくり話しててよ」

一階に下りた俺にお袋が話しかけてきた。
ミコトに一生懸命話しかけるばあちゃんを見てボケが進行したんじゃないかと心配になったようだ。
まぁ普通はそう思うよな、誰も居ない空間に向かって延々と俺の子供の頃の話をしてるんだから。

でも安心していいぞお袋、ばあちゃんボケるどころかブルーレイ並みに鮮明な画面で記憶が蘇ってるから。

「あんた、よくおばあちゃんの話に合わせてあげられるわね」

「まぁな、でもばあちゃんそんなにボケてないよ、しっかり昔の事覚えてるし」

「でも昨日までは幻覚を見たりするほど酷くはなかったんだけどねぇ」

「それは、その、あれだ・・・とりあえず今日の晩ご飯はミコトの分も作っておいてよ」

「ミコトって誰？」

やば・・・ばあちゃんとミコトと三人で普通に話してたから、ついウッカリと・・・

「え～っと、ミコトって言うのはばあちゃんに見えてる俺の彼女の名前だよ」

「名前って・・・」

お袋達も話を合わせやすいように、俺は名前や外見と言ったミコトの特徴を教えてやった。

全部聴き終えたお袋がポツリとささやいた。

「そこまで細かく思い浮かべるなんて・・・おばあちゃん余程あんたのお嫁さんが見たいんだねぇ・・・あんたにもっと甲斐性があったら本当にひ孫を抱かせてあげられるのに・・・あぁ～、私も早く孫の顔が見いよ」

ちょっと待て！
三十歳や四十歳なら分かるけど、俺まだ二十歳だぞ？　バリバリの現役大学生だぞ？　それなのに子供が居ないのは俺のせいなのか？　ってかそもそも俺悪いのか？

まぁ、ひ孫は別としてもお袋に孫を抱かせてやれないのは事実だしな、反論するのは止めておこう。

「とにかくだ！　ばあちゃんにボケてるなんて事言わないで、これからはミコトが居ると思って接してやってよ」

「あんた優しいねぇ、小さい頃からおばあちゃん子だったけど・・・」

いや・・・小さい頃の話は上で散々聞いたから・・・もう勘弁してくれ・・・
って言うか、この家の人間は俺の小さい頃の事しか話題無いのかよ！　もっと他に芸能界とか政治とか話題はいっぱいあるだろ！

とは言え、普段居るのがお袋とばあちゃんと弟だからな・・・頭を使う話題を求める方が無理か。

「じゃあ、俺そろそろ二階に戻るから」

「ご飯の前にお風呂入るでしょ？　もう沸いてるわよ」

「あぁ、適当に入る」

階段の途中まで来るとばあちゃんとミコトの声が聞こえた。
まだ話してるのかよ・・・よくそんだけ話す事があるよな、別の意味で感心するよ。

「ありがとうねミコトさん、浩ちゃんの事を好きになってくれて本当にありがとうね」

おぃ！　そんな話題で盛り上がってたのかよ！

『いいえ、救われたのは私の方です、浩二さんと出会えて本当に良かったと思っています』

「ミコトさんはずっと浩ちゃんと一緒に居てくれるんだろ？」

『はい、私が息を引き取るその時まで、ずっと傍に居ます』

「ありがとうね、その言葉を聞けただけでも何も思い残すことは無いよ、安心しておじいさんの所にいけるよ」

ばあちゃん・・・寿命を知ってる俺からするとその言葉はシャレになんないよ・・・

そもそもばあちゃん勘違いしてるし・・・

今の言葉はミコト自身が「自分が死ぬまで傍に居ます」って意味で言ったと思ってるんだろうけど、それって逆だから・・・「俺が死ぬまでは傍に付いて居ます」って意味だから・・・

これ以上話が変な方向に行かないように、俺は部屋の中に入る事にした。

「なんだよ、ばあちゃんまだ話してたのか？」

「あ、浩ちゃん、ミコトさんは本当にいい子だねぇ、こんな優しい子がお嫁さんに来てくれるんだったら安心しておじいさんの所へ・・・」

それさっき聞いたから・・・

ミコトは反論もしないで笑顔で聞いてるけど内心どう思ってるんだろうな。

俺に対して好意をもってくれてるのは確かだ、だけどこの落ち着いた態度を見てると、「俺がミコトの事を好き」と「ミコトが俺の事を好き」は少し違う感覚のような気がしてきた・・・

って俺は何を考えてるんだよ、ミコトに悲しい思いをさせたくないから、悲しい息を引き取らせたくないからやってる事なのに・・・ミコトは俺に好意を抱いてくれてる・・・それだけで充分じゃないか。

「ばあちゃん、晩ご飯の用意するからってお袋が言ってたぞ」

「あら、じゃあ私も手伝いに行こうかね」

「風呂の準備が出来てるみたいだけどミコトはどうする？　先に入る？」

「何言ってるの浩ちゃん一緒に入ってくればいいのに、ミコトさんもいいよね？」

ちょっと待て！　いくらなんでもそれは駄目だろ！

『はい、ではお相伴に与ります』

ん？・・・それって俺と一緒に入ってもいいって事？
何か知らんがイベントキター！
いくら神様とは言え見た目は中学生くらいの女の子だぞ、いいのか？　本当にいいのか？　俺捕まったりしないか？

「じゃ、じゃあ行こうか？」

『はい』

落ち着け俺！　決して嫌らしい気配を気取られるんじゃないぞ！
深呼吸して冷静になるんだ！

ヒッヒッフー、ヒッヒッフー・・・

って、そりゃ違うだろ！

「え～っと・・・その」

『私には入浴は必要ありませんから遠慮しないで入ってくださいね』

「ミコトは？」

『こちらの脱衣所で待っていますのでごゆっくりどうぞ』

そうだよな、当たり前だよな、何期待してたんだよ俺・・・

風呂に入る為には当然服を脱がないといけない訳だが、後ろを向いてるとは言えミコトの横で裸になるのって勇気がいるな・・・って言うかほとんど罰ゲームだよなこれ。
まぁ多分ミコトはばあちゃんを喜ばせる為に無理して風呂場まで付き合ってくれてるんだろうから気にしない気にしない。

俺はそそくさと服を脱ぐと、浴室に入って扉を閉めた。

「ふぅ～・・・実家の風呂は広くて気持ちいいよな～、アパートだとどうしても膝を抱えて入らなきゃいけないしな」

ミコトとばあちゃんが何を話してたのか少し気になった俺は、ゆったりと湯船に浸かりながら外に居るミコトに声を掛けた。

「なぁミコト」

『はい？　何ですか浩二さん』

「今日はばあちゃんの相手してくれてありがとうな」

『いいえ、浩二さんの色々な事が聞けて楽しかったですよ』

その「楽しかったですよ」の後にヒッソリと聞こえるクスクスクスには、う〇ちを漏らした事とか、裸で立たされた事なんかが含まれてるんだろうな・・・

「ばあちゃんすっかりミコトの事を俺の嫁だと思って変な事ばっかり言ってたんじゃないか？　ごめんな」

『どうして謝るんです？』

「だって、俺なんかの嫁扱いされて気分悪いんじゃないかなって」

『悪い気分なんかじゃないですよ、もし私が神ではなかったら・・・・
』

ん？　なんだ今のセリフ？　何か意味深だな？

いつもなら聞き流す些細な事なんだろうけど、ばあちゃんがやたらと嫁だの好きだの言うもんだから変に意識してしまう・・・

さっきは「好意を持ってくれてるだけで充分」って考えてたけど、やっぱりミコトは俺の事どう思ってるのか気になるよな・・・

拾壱の語り部　　ー　ラウタシ　ー

ふぅ、いい湯だったぁ・・・

「ミコト、そろそろ上がるから悪いけどこっちを見ないようにしてくれるかな」

『え？　あ！　浩二さん！　今はちょっと』

「何？　よく聞こえないんだけど」

『浩二さんダメ！　まだ開けないで下さい！』

俺は手拭いで前を隠したままバスタオルを取ろうと脱衣所に出たんだが、その時、目に飛び込んできたのは信じられない光景だった・・・

ちょ・・・ちょっと待て・・・冷静に判断しろ俺・・・

どうしてミコトが下着姿で立ってるんだ？・・・

ドッキリカメラか？　それとも突如イベント発生か？

どちらにしてもこんな嬉しい・・・いや、そうじゃなくて！

「ミコト！　何でそんな格好してるんだよ」

『えっと・・・おばあ様が用意して下さった浴衣に着替えようと思って・・・』

「着替えって・・・別に脱がなくてもいつもはボーっと光に包まれるだけで変ってただろ？」

『この浴衣は私が作り出した物ではないので・・・その・・・普通に着替えないと・・・』

いつもは冷静さを失わないミコトがこんなに動揺するなんて、いったいどう反応すればいいんだよ。

「ご、ごめん・・・その・・・とにかくごめん」

『いえ・・・私の方こそ御見苦しい姿を・・・』

見苦しいだなんてとんでもない！　そんな事は決して無いぞ！
かえって目の保養と言うか、心に栄養と言うか、元気ハツラツと言うか・・・

いや、そんなイヤらしい考えをミコトに知られてはマズイ・・・
まずは落ち着け。
ヒッヒッフー、ヒッヒッフー・・・

って、このボケはさっきもやったような気が・・・デジャブーか？

「ははは・・・俺、中で体拭いてるから、ゆっくり着替えていいよ」

『分かりました・・・ありがとう御座います・・・』

とは言ったものの、俺の頭の中からはミコトの下着姿が離れず、自分でも心臓の音が聞こえるくらい鳴っているのが分かったが、彼女が気まずい思いをしないように出来る限り平静を装った。

あれ？・・・ちょっと待てよ・・・

何かおかしくないか？　大事な事を見落としてるような・・・

そうだよ、ミコトの姿は俺とばあちゃん意外には見えてないんだから、普通の浴衣に着替えちゃったら着物だけプカプカ浮いてるって事になるよな？　それって絶対にヤバいって！

俺は思い浮かんだ疑問を投げかけてみた。

『その事でしたら心配いりませんよ、私が身に纏った時点で人の目には映らなくなってしまいますから』

「そっか、だったら安心だな・・・って、それならどうしてわざわざ着替えたりするの？」

『それは・・・この浴衣を着た姿をおばあ様に見てもらいたかったから・・・』

そうか・・・ばあちゃんに喜んでもらいたくて・・・

俺はミコトの優しさに感謝しながら、更に何事も無かったかのように冷静に言った。

「そろそろ晩飯の用意が出来てると思うから着替えたら行こうか」

『・・・はい』

居間に行くとテーブルの上は大量のオカズで凄い事になっていた。
俺が居た頃にこんなご馳走が晩飯に出た事あったか？　あるとすれば大事な客が来た2～3度・・・

って、そうか・・・
いつの間にか俺は『滅多に来ない大事な客』になるほどお袋達から遠ざかってたんだな。

「あれ？　ばあちゃんは？」

「おばあちゃん風邪の事も忘れてあんたと話してたでしょ？　やっぱり少し疲れたみたいだから先に寝るって」

「おいおい、大丈夫なのかよ」

ばあちゃんの寿命を知ってるのに大丈夫かって言うのも何か変だけど、まぁ死因は風邪じゃないのは分かってるし、こじらせて酷くなるなんて事はないと思うけど・・・
それでも天命を全うするまでは苦しまないに越したことはないからな、無理しないでくれよばあちゃん。

横を見るとミコトが少し残念そうな表情をしてる。
たぶん自分の浴衣姿を見せられなかった事とか、ばあちゃんを疲れさせたのは自分のせいだとか色々な事を考えてるんだろうな・・・

「大丈夫だから、明日になったら元気になってると思うし、そしたら浴衣姿を見せてあげたらいいよ」

『浩二さん・・・私の考えてる事がわかるんですか？』

「いや、何となくそんな気がしたから」

あんまりミコトと話してると、お袋と弟が妙なツッコミを入れてきそうだから続きは部屋でする事にして。
さて！　晩飯でも食べるとするか！

久しぶりに食べるお袋の味はやっぱり旨い！
ミコトの料理とどっちが旨いって聞かれたら困るけど、強いて例えるなら『和食と洋食どっちが旨い？』って言うのと同じで、どっちにもそれぞれの良さがあって両方旨いとしか答えられないな。

満腹になった俺は二階へと向かった。
食事中ずっとニヤニヤしてる弟の顔を見て何となく嫌な予感はしてたんだが、部屋の中は見事に予想通りの状態になっていた・・・

部屋の真ん中に敷かれてたのは俺が前に使ってた布団ではなく、来客用のダブル布団・・・そしてその上には綺麗に並べられた枕が二つ・・・

はぁ・・・どんな設定で何を期待してるんだよ。

って言うか弟よ。

俺は見えない女性の事でここまで妄想を膨らませて喜んでるお前の頭の中が心配だぞ・・・

「ははは、まったく何考えてるんだろうな、あいつは・・・押入れの中に俺が使ってた布団があるから、ちょっと待ってて」

『・・・別に私は・・・』

ん？　幻聴か？　今凄い言葉が聞こえた気がするんだが・・・今日はあえて無視する事にしよう。

じゃなきゃ理性を保つ自信が無い・・・

俺はそそくさと布団を敷き、枕を1つ移動させ床についた。

暗闇の中、目を瞑るとミコトの下着姿が浮かんでくる・・・うぅ・・・眠れない・・・

「・・・ミコト・・・もう寝た？」

『いいえ、まだ起きてますけど・・・』

「今日色々と気を使わせてごめんな、疲れただろ？」

『そんな事ないですよ、素敵な家族で羨ましいです』

「羨ましい？　あれが？」

『私には家族と呼べる対象が居ませんから』

「え？　その・・・ごめん・・・変な話になっちゃったね」

『あ、ごめんなさい・・・そんな意味ではなくて』

そう言うと、ミコトはゆっくりと話し始めた。

『神の中には夫婦となったり子供を授かったりした者も居ますが・・・私は、大昔の人の自然への恐れや敬いの心によって生み出された存在・・・だから親と呼べる者も居ないし、この先、私自身が誰かと結ばれる事も、親となる事もないと思います・・・』

「・・・・・・・・・」

『だから、私を家族扱いして下さった事が嬉しくて』

「そうだったんだ」

『浩二さん知ってましたか？　この浴衣っておばあ様が若い頃に着ていた物なんですよ』

「そうなの？」

『晩ご飯の前に嬉しそうに話されてましたけど、この家に嫁いで来

た時に嫁入り道具の1つとして持ってきて、その日の夜に初めて袖を通されたそうです』

「へぇ・・・そんな話もしてたんだ」

『そしておじい様が息を引き取られた最後の夜もこの浴衣を纏い、添い寝をして見送ったと聞きました』

そんな話、今まで1度も聞いた事ないぞ・・・

俺や弟は男だから、ばあちゃんも話したりしないのは分かるけど・・・たとえ同性だとしても、お袋や親戚の誰にも話してない事なんじゃないかな・・・

『この浴衣には、おばあ様の想いがたくさん詰まっていて、身につけるととても温かい思い出に包まれて心地いいんですよ』

「うん」

『私は長い時を過ごしてきたのに、こんな想いを経験した事がありません・・・限りある命の中でこんなにも一人の男性を思い、幸せな時を過ごして来たおばあ様がとても羨ましいです・・・』

「ミコト・・・」

『今まではそんな事考えなかったのに・・・ううん、そうじゃない・・・私が神である事や人と同じ時間を過ごせない事、それは変えようのない・・・どうしようも無い事だからわざと考えなかったのかもしれませんね・・・でも浩二さんと出会ってからは・・・』

そう言ってミコトは黙ってしまった。

神様として俺なんかには想像も出来ないくらい長い時を過ごし、多くの物事を見てきた筈なのに・・・それらは全部他人事で、ミコト自身は何一つ知らない事ばかりなんだよな・・・

周りから見たら進展しなくてもどかしいかもしれないけど、俺は残された時間の全てをミコトを想う事だけに使いたい・・・だから今は無理に先に進まなくてもいい・・・そう思う。

『ねぇ、浩二さん・・・』

「ん？　どうしたの？」

『その・・・手を握ってもいいですか？』

そう言って伸ばされた小さな手を、俺は優しく握り締めた。

『おやすみなさい・・・浩二さん』

「おやすみ・・・ミコト」

手の温もりに安心したのか、ミコトはすぐに寝息を立てて眠ってしまった。

俺はと言うと最初はやはり落ち着かなかったが、ミコトの安心しきった静かな寝息を聞いているうちに深い眠りへと落ちて行った・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3021p/

月読神　ーツクヨミノカミー

2011年10月8日08時29分発行